令和５年度全国高等学校総合体育大会　「審判員報告」

Ｃ２

女子審判長　木村　幸代

１．採点上打ち合わせた事項（監督会議での報告事項も含む）

①適用規則の確認

採点規則 2022 年版変更規則 I、女子体操競技情報 32 号及び全国高体連制定の高校適用規則を適用する。

②採点指針の確認

採点指針に則り、美しい姿勢での演技を採点の最重要項目とすること、技の姿勢欠点はもちろん演技全体を通した身体の姿勢や足先の美しさに欠ける演技は厳密に減点し、美しい姿勢での演技との差を明確化させる。

③D スコアへの問い合わせについて

まずは直接 D1 審判へ口頭で質問をし、意見の相違がある場合は書面を審判長に提出する。問い合わせの時間に関しては、基本的には次の種目に移動するまでの間、最終演技者については、次の種目のウォーミングアップの時間内に対応をすること。検証用のビデオはないため、再検証はできないことの確認。

④練習時間について

【予選】１組最大６名　（チーム４名＋個人２名）

ＶＴ　：１人２本
ＵＢ　：チーム３分２０秒、その後　個人２名各５０秒
ＢＢ　：チーム　２分、その後　個人２名各３０秒
ＦＸ　：３分

【決勝】１組最大５名（４名＋種目別通過者１名）

ＶＴ　：１人２本
ＵＢ　：チーム３分２０秒：個人各５０秒
ＢＢ　：チーム２分：個人各３０秒
ＦＸ　：チーム・個人ともに１組２分３０秒

⑤出血の対応について

出血があった場合には、速やかに競技スタッフまたは救護係へ連絡をすること。競技の進行に関わる場合はＤ１審判へ申し出ること。

２．採点上起こった事項とその処理

①演技中のコーチのかけ声（合図）

演技中に選手への指示となるようなかけ声や応援と見られるかけ声、拍手をする監督がいたため口頭注意にて対処した。（複数件）

②競技中の演技台での練習

国内競技会ではマット上が演技台となるため、助走路を含むマット上での練習は演技中、採点中できないことになっているが、練習をしている選手がいたため口頭注意にて対処した。（複数件）

③女子決勝　段違い平行棒の跳躍板の取り外しについて

段違い平行棒では、跳躍板を外すために補助者とは別のコーチまたは選手が演技台（国内ではマット上）に上がることが認められている。（採点規則第３章 3.1）

本来なら補助者とは別のコーチまたは選手１名のみが跳躍板を取り外すために演技台に上がることが認められているが、今大会はチームにつけるコーチ（監督）は１名のみであるため、選手の安全を考慮し、今大会の決勝の競技に限り選手２名で跳躍板を取り外すことを認める対応をすることを、全国高体連委員長に確認。承認を得て、決勝通過校へその旨伝達をした。

３．その他特記事項・意見・感想等

今大会、会場はコロナ禍以前の雰囲気を取り戻し、多くの観客、大きな声援の中での開催となりました。参加選手、監督をはじめ関係者の皆さんのご尽力により、すべての競技を無事終えることができました。採点業務においても、タイトなスケジュールではあったもののスムーズに業務をすることができ、予定されている時程に遅れることなく進めることができました。得点集計システムに不具合は発生せず、担当者の皆さんが競技中に迅速なサポートをしてくださったことがスムーズな業務に繋がったと思います。関係者各位に改めて感謝申し上げます。

「美しい姿勢での演技」これが採点の最重要項目として採点指針に掲げられています。今大会、この美しい姿勢がまだ不十分と感じる選手が見受けられ、少し残念に思いました。膝・つま先はもちろんのこと、手先足先まで身体のすべてに意識が行き届いている、そんな演技を目指して欲しいと思います。それは個々の技だけではありません。立っているとき、ポーズをしているとき、歩いているときすべてに求められるものですので、今一度、選手自身が「美しい姿勢での演技」を追求して欲しいと切に願います。そしてそれは、今大会出場したすべての選手に願うことでもあります。

「美しい姿勢での演技」は、高校生たちがこれから長く選手生活を続けていくうえで、とても大切なことだと思います。一朝一夕にできるものではありませんし、時には慣れた方法を変えるなど時間を要するものではありますが、次年度以降、高校生たちが姿勢欠点のない「常に美しい姿勢での演技」を披露してくれることを心より願っています。

跳馬

Ｄ１審判員　白川千尋

１．採点上打ち合わせた事項

①採点指針の確認

情報３２号の採点指針に則り「D スコアの高い跳躍技」「スピード感があり、高さと距離を伴うダイナミックな跳躍」「着地の先取りができた高い姿勢での安定した着地」の３点を重視し、各審判が各技の理想像を持って採点を行うことを確認。

ダイナミックさに欠ける跳躍や各局面において著しい技術不良が見られる跳躍には、規則集第８章の「一般欠点と減点表」、第１０章跳馬「種目特有な実施減点」の項目に則り厳密に減点をし、明確に差をつけることを確認。

変更規則Ｉにおいて「グループ１の跳躍技のみ」に適用される種目特有な実施減点、「（追加）支持局面・支持が長い 0.10/0.30/0.50」「（変更）第２空中局面・ダイナミックさに欠ける 0.10/0.30/0.50」について確認。

②映像による採点の確認

③線審の任務確認

練習回数のカウント、ラインの踏み越しの判定の確認。

コーチからライン減点の再確認の要求があった際に備え過失の状況を記録することを確認。

２．採点上起こった事項とその処理

①前転とび～前方屈身宙返りを試みたが足から先に着地できなかった実施に対し、無効 0.00 と判断した。

②跳躍せず０点をとる選手が挙手しているにもかかわらず、マットにあがって次の選手の準備をしようとする監督がおり、器具から離れるようその場で注意をした。

３．その他特記事項・意見・感想等

今大会ではどの選手からも 2023 年強化指針および採点指針に掲げられている「高い D スコア」を目指して練習に取り組んできた姿勢が見受けられ、その中でも、ダイナミックかつ安定した着地にまで完成度を高めている選手は、高い E スコアを獲得することができていました。一方で、残念ながら不安定で未完成な跳躍も数多くあり、第１空中局面での膝の曲がり・脚の開き、第２空中局面での高さ不十分、身体の姿勢が不正確、着地における姿勢の欠点などの減点が嵩み、高い D スコアを実施しても結果的に E スコアが伸びない跳躍、中には怪我をしてしまうのではないかと心配されるような跳躍もありました。

指針として高い D スコアを掲げられてはいますが、未完成で危険を伴うような実施をしてまでも挑戦を促している指針ではありません。各局面において体操競技の基本となる「正

確さ・姿勢の美しさ」を追求したうえで、跳馬に求められる「ダイナミックでスピード感のある跳躍」を期待します。

段違い平行棒

Ｄ１審判員　香月あゆみ

１．採点上打ち合わせた事項

①採点指針の確認

女子体操競技情報 32 号に記載されている段違い平行棒の採点指針３項目を確認し、指針に沿わない演技は、減点項目のいずれかから減点すること、採点指針をもとに、どのような演技が求められているのかを理解した上で採点を行うことを確認した。特に、け上がり、振り上げ倒立、車輪、支持回転系の技などの基本技の姿勢に注視し、欠点のある実施に対しては厳密に減点すること、体線の美しい演技とそうでない演技を E スコアにて明確に差をつけることを確認した。さらに、技の特性や難易度を考慮し、演技の質、技の質がスコアに表せるような採点をすることを確認した。

②変更規則の確認

前向きでない構成の減点や、「短い演技」と D 審判団が判断をした場合は、技の数を E 審判団へ口頭にて伝えることを確認した。

③アシスタント任務の確認

計時の任務内容（個人・チームの練習時間の計り方、中断時間の計り方）を確認した。

練習時間の計測については、チームの練習が終了してから個人の練習時間を計測するよう確認した。落下による中断時間については、時間の経過を知らせること、終末技で足から着地できなかった場合は、立ち上がった時から落下時間を計測すること、選手が落下時間の計測を開始することを避けるために故意に立ち上がらない場合の対応について確認した。さらに、コーチから計時の減点の再確認の要求があった際に速やかに対応できるよう、過失はすべて記録しておくことを確認した。

２．採点上起こった事項とその処理

落下後、中断時間の超過があったため、採点規則に則り最終スコアから 0.30 の減点をした選手が 3 名。

３．その他特記事項・意見・感想等

今大会、予選で実施された全 268 演技のうち、Ｄスコアが 5.0 以上の演技が 39 演技（14.6%）、4.5 以上 5.0 未満が 47 演技（17.5%）、4.0 以上 4.5 未満が 28 演技（10.4%）、3.5 以上 4.0 未満が 24 演技（9.0%）、3.5 未満が 130 演技（48.5%）でした。Ｅスコアで

は、8.00 以上のスコアを獲得できたのは、13 演技（4.9%）、7.50 以上 8.00 未満が 32 演技（11.9%）、7.0 以上 7.5 未満が 30 演技（11.2%）、7.0 未満が 193 演技（72%）でした。高い D スコアを獲得するために、より難度の高い技や組み合わせに挑戦している選手もおり、たいへん頼もしく感じられた一方、身体の姿勢の美しさに欠ける演技、完成度の低い演技や技の実施も多かったように思います。特に、け上がり、振り上げ倒立、車輪、支持回転系といった基本技では、足先まで意識が行き届いている演技と、実施するたびに膝やつま先、体線の緩みがみられる演技が見受けられました。け上がりでは脚を持ってくる際の膝やつま先、身体の伸びや腕の曲がり、振り上げ倒立では倒立姿勢だけでなく、振り上げる際の膝やつま先、身体の反り、車輪では低棒を通過する際の膝やつま先、支持回転系の技では正確な技の完了を目指すことはもちろんですが、倒立へ到達するまでの肘の曲がりや、身体の反り、倒立姿勢での腰の曲がり等が気になりました。美しく伸びた体線での正確な技の実施を目指していただきたいです。

また、今大会は D・E 難度の空中局面を伴う技や棒間の移動技、D 難度の終末技に積極的に取り組む選手も多く見受けられました。高い D スコアの獲得を目指すために挑戦をしてきていることが伺えましたが、その一方で落下も多く見受けられたように感じます。失敗し落下した際、どの技から演技を開始するかは難しい判断になるとは思いますが、再開した技から採点が始まります。け上がり、振り上げ倒立や車輪の繰り返しはもちろんですが「落下はしたが、難度は承認されている技」の繰り返しにより、不必要な減点をされてしまう実施が複数見受けられました。ルールを理解し、練習の段階から意識していれば防ぐことのできる減点だと思います。今後も、美しく伸びた体線での正確な実施、振幅が大きいダイナミックな実施、その上で高い D スコアを目指すような、練習を積んでいただきたいと思います。

平均台

Ｄ１審判員　大川由美子

1. 採点上打ち合わせた事項

①採点指針の確認（情報 32 号）

平均台の指針 4 項目を確認。アクロバット系の技でもダンス系の技でも、常に手先足先までコントロールされた美しい姿勢で行われる正確で安定した技の実施。加えて身体を最大限に使った動きによる芸術性豊かな演技を評価することを共有。一つひとつの技はもちろんのこと、演技全体の理想像を持ち、指針に沿った演技とそうではない演技との差を E スコアにて明確に表すことを確認した。

ダンス系の技の不正確な実施に対しては、「身体の姿勢の減点」「正確さ」の項目にて厳密に減点すること、特に姿勢の減点については 0.1 なのか 0.3 なのか、もしくは 0.5 なのか、その質の差をしっかり見極めることとした。あわせて芸術性と構成の減点項目についても項目ごとに確認し、各項目がどのような実施に対して減点されるのか共有した。0.1 の減点項目が多く、減点をするのか・しないのか、個々にて根拠のある採点をするよう確認した。

②短い演技についての確認

「短い演技」とD審判団が判断をした場合は、技の実施数によりEスコアの最高点がかわるため、その都度承認した技数をE審判団へ口頭にて伝えることを確認した。

③アシスタント任務の確認

計時の任務内容（予選・決勝の練習時間の計り方、演技時間・中断時間の計り方）を確認した。今大会の計時方法は、2 台の iPad を使用し、それぞれタップボタンが 2 つ(START・STOP)あり、計時動作が多少煩雑になることをふまえ、ミスを防ぐため落下時の起立を行わないこととした。また、コーチからの質問があった際に対応できるよう、全選手の秒数を記録しておくことを確認した。

2. 採点上起こった事項とその処理

①短い演技

数名の選手が短い演技となり、承認した技数のEスコアの最高点から実施減点をおこなった。

②Dスコアの変更（1件）

得点表示後に再確認の際、計算が異なっていたことに気づき、審判長に報告し修正。改めて正しいスコアを表示した。

③演技台での練習

採点中に演技台で練習した選手が複数名おり、審判長からの注意をおこなった。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会の予選272演技において、Dスコアの分布は以下のとおりです。
5.5以上25名（最高Dスコア6.4）、5.0以上5.5未満65名、4.5以上5.0未満72名、4.0以上4.5未満32名、3.5以上4.0未満30名、3.0以上3.5未満19名、3.0未満29名となり、4.5以上の演技が約6割を占めることとなりました。また、Eスコアにおいては、8.0以上7名、7.5以上8.0未満17名、7.0以上7.5未満35名、6.5以上7.0未満38名6.0以上6.5未満48名、6.0未満127名と、スコアが伸び悩んだ印象を受けます。

多くの選手が高いDスコアの獲得を目指した演技構成に積極的に取り組んでいました。組み合わせ点を得るために様々な技の組み合わせに挑戦する選手、終末技ボーナスを得るためにD難度以上の技を実施する選手も多かった印象です。また一方で、落下などの大過失はもとより、未完成な技の実施や芸術性の観点からも減点が大きくなり、Eスコアが伸び悩む傾向が見受けられました。特にダンス系の技の不正確な実施が多く、膝やつま先のゆるみ、開脚度、規定されたひねりの不足、そして忘れがちな上半身の姿勢。美しい体操を目指しての指針に結果として沿っていない実施となれば、Eスコアに差が出てきてしまいます。演技の構成においても「台に近い動き」が認められる内容に至っていない演技が本

当に多く感じました。特にポーズで終了してしまい「動き」となっていないケースが多く、今一度ご確認いただきたい部分です。「横向きの動き」も「台に近い動き」も上位選手のように絶対に減点されないという意思を感じる程の内容で振付けすることにより、スコアをさらに伸ばすことができます。

また、技の承認においては、ダンス系の技の不正確な実施が多く見受けられ、昨年同様、輪とび系・横向きの 1/2 ひねりを伴うジャンプにおいて承認できず、異なる技として承認したものが多くありました。その結果、同一技の繰り返しとなり難度点や構成要求を獲得できなくなる演技もあり、構成の段階で技の実施順序等の工夫により防げることもあったと予想されます。構成要求が満たせない可能性のある実施には、代替の技や組み合わせを日頃から認識して練習していくことも必要であると感じました。

技と技のつなぎ目や動きの部分については、立ち姿勢や表情、指先つま先までコントロールされた美しい表現、足を前や後ろに 1 歩出す際の出し方等々、演技全体を通して常に意識されている実施も見られ、Ｅスコアにてしっかり評価されました。芸術性に関する減点項目も注視されている中、一つひとつの技の正確で安定した実施はもちろんのこと、とどまりや調整なく、「演技する」という観点を大事に、ゆか同様にひとつの「作品」として完成された演技を今後も期待します。

ゆか

Ｄ１審判員　針谷美智子

1.　採点上打ち合わせた事項

①採点指針の確認

体操競技情報 32 号に記載されているゆかの採点指針 4 項目を確認し、各審判員が演技の理想像をもち、指針に沿わない演技は、減点項目のいずれかから減点すること、どのような演技が求められているのかを理解した上で採点を行うことを確認した。また、立ち姿勢が悪い、膝が伸びない、足がゆかから離れたときにつま先を伸ばす意識ができていない演技に対しては、芸術性と構成の減点項目を用いて厳密に減点することを確認し、指針に沿った演技とそうでない演技を E スコアにて明確に差をつけることを確認した。

②短い演技についての確認

「短い演技」と判断した場合、D1 審判は、承認した技の数を E 審判団に口頭で知らせる旨を伝えた。

③アシスタント任務の確認

計時・線審の任務内容を確認し、コーチから計時の減点の再確認の要求があった際に速やかに対応できるよう、過失はすべて記録しておくことを確認した。

2.　採点上起こった事項とその処理

①音楽に関するトラブルについて

会場練習の際、持参したUSBの不具合により、音楽がかからないチームが3件あった。各所属にて別のUSBへデータを転送して使用する、拡張子を変えるなどの対処をしていただいたことで競技当日は、音楽のトラブルがなかった。

②器具に関するトラブルについて

予選２日目、ローテーションの最中に出場校のコーチよりビス（留め具）が落ちていたとの報告を受けた。競技部長に知らせ、器具の点検等をしていただいた。

3.　その他特記事項・意見・感想

今大会、予選で実施された全 271 演技のうち、Dスコアでは、5.5 以上の演技が 19 演技（7.0%）、5.0 以上 5.5 未満が 55 演技（20.3%）、4.5 以上 5.0 未満が 66 演技（24.4%）、4.0 以上 4.5 未満が 52 演技（19.2%）、4.0 未満が 70 演技（29.2%）でした。Eスコアでは、8.00 以上のスコアを獲得できたのは、19 演技（7.3%）、7.50 以上 8.00 未満が 48 演技（18.3%）、7.0 以上 7.5 未満が 58 演技（22.1%）、7.0 未満が 137 演技（52.3%）でした。

高い D スコアを獲得するために、アクロバット系の組み合わせを取り入れた演技構成や C 難度や D 難度以上のダンス系の技に挑戦したりする選手が多くみられました。また、１つ１つの技をていねいに正確に実施している演技や美しい姿勢を意識した演技も多くみられ、評価できるものが多かったように思います。一方で、アクロバット系の技、ダンス系の技ともに不正確な実施が目立つ演技も見受けられました。特に、ダンス系の技では、開脚不十分、脚の曲がり、つま先が伸びないなど身体の姿勢が理想的な実施から大きく逸脱するものもありました。たとえ、D スコアに直接関わらない技であっても欠点があれば減点が伴います。ダンス系の技では、開脚度ばかりにとらわれず、膝やつま先、上体の姿勢まで意識の行き届いた美しい姿勢での実施を心がけていただきたいと思います。

芸術性に関しては、コーナーで片足を上げた時やゆかに接する動きの時など、技以外の部分においても身体の姿勢や足先を意識している演技が多かったように思いました。美しさに対する意識は、引き続き、高く持っていただくとともに「身体の各部位が芸術的表現に十分に関与していない」においては、改善の余地がある演技も多くあったので、より意識的に取り組んでいただきたいと思います。

以上